国文学研究資料館紀要　第三号（一九七七年三月）

『草山和歌集』の配列と成立について

島原泰雄

要約　深草元政上人の歌集『草山和歌集』〔寛文八年（一六六八）、平楽寺村上勘兵衛刊〕の配列及び成立について考察する。

先ず、配列についてであるが、和歌の内容・詞書を検討し、可能なかぎり、その歌詠年時を確定もしくは推定した。その結果、本集は元政上人出家〔慶安元年（一六四八）〕以後、没年〔寛文八年（一六六八）〕までの詠歌を収録したもので、その配列は、歌詠年時を追ってであるとの結論を得た。

次に、成立についてであるが、本集の歌数が百五十首である点に着眼し、その理由を考え、それを手掛りに成立事情を考察した。その結果、本集はほとんどが自選編集によるもので、後人の手が加わったとしても、それは極く僅かなものであったであろうと推定した。

『草山和歌集』は元政上人（以下「上人」を略す）の歌集であり、元政没四年後の寛文十二年（一六七二）に、平楽寺村上勘兵衛によって刊行された。『国書総目録』には、内閣文庫を初め二十四個所の所在を掲げているが、現在なお古書目録等に出ることもあり、現在数は、より多いものと思われる。但し、本集は初版と同一版式のものばかりで、改版されることはなかったようであるが、かなり多くの部数が刷られたらしく、後刷本と思われる粗悪な刷本までが見られる。また、写本も現存するが、管見に及んだものはすべて、直接あるいは間接に版本から転写したと思われるものばかりである。以上のことは版本『草山和歌集』が広く流布したことを物語っており、たとえば、伴蕃蹊が『続近世畸人伝』で取り上げた元政の和歌も本集に収録された和歌である。そこで、本稿では『草山和歌集』を取り上げ、その配列と成立について考察してみようと思う。

○

『草山和歌集』は、元政辞世の歌で終っており、そして、寛文十二年（一六七二）に版行されたものである。従って、一応本集は、寛文八年（一六六八）元政没後から寛文十二年（一六七二）の間に、第三者の手によって編撰されたものであろうと考え得る。もとより、元政が生存中から歌人としても知られていたであろうことは言うまでもない。しかるに、すでに生存中にかなり多くの作品を刊行した元政であったが、歌集は刊行していない。このことについては、元政にその意志がなかったと考えるよりは、やがては自撰家集を纒めたいと考えていたに違いないと考えたい。であるから、元政没後、門弟の誰かが追悼の意も含めて刊行したのではないかと思う。

ところで、編撰に際しての配列意識、換言すれば、『草山和歌集』がどのような配列によって構成されているかについてであるが、一応「春たつこゝろを」の歌で始まっているが、部立のないことは一見して明らかであり、さりとて意識なしに意味なく配列したとも思われない。とすれば、あるいは歌稿の集積が時を追っての配列となるのだが、

それを確認する為、以下に和歌の内容・詞書を検討し、その歌詠年時を探ってみたいと思う。また、一首〳〵の和歌の検討それ自体、詠作の意図を窺う上にも役立つであろう。

春たつこゝろを

1　こほりゐしのなかのしみつうちとけてもとのこゝろにかへるはるかな

（和歌の頭に付した数字は『草山和歌集』に付した歌番号である）

「こほりゐしのなかのしみつうちとけて」とあるのは、出家しようと考えながら果せず、悶々鬱々としていた心が解けたという意を内に籠める。「もとのこゝろ」とは、出家し、仏門に入ろうと考えていたその心を指し、「もとのこゝろにかへる」とは、やっと念願の出家が叶ったという意である。たとえば『正保四年和歌』(1) 2番歌、

（正保四年丁亥元日）

去年も又むなしくくれてめくりあふ春の心もはつかしき哉

と比較する時、その心の変化歴然たるものがある。従ってこの1番歌は元政出家後、初めて迎えた春、即ち慶安元年（一六四八）春の詠であろう。

むさしのくにゝありけるともたちのもとへ

8　むさしのはおもふゆめちもはてやなきあはてそかへるうたゝねのとこ

歌意は「うたたねの夢の中で武蔵の国に在る友に逢いに行ったが、武蔵の国は果てもなく遠く、逢わないうちに目覚めてしまったよ」と言うのである。武蔵の国は江戸を指す。友とは彦根藩士で江戸詰めのものか、または元政が彦根藩士として江戸に住んだ頃に出来た友であろう。ところで、元政は出家し、妙顕寺に入る時、彦根藩を初め権門から身を遠ざけようと心中深く期したようである。たとえば、承応三年（一六五四）紀伊頼宣が母の為に養珠寺を築き再三

招聘したが、元政はついに行かず、その翌年、深草に一庵を結んだのである。これは、一つには、たとえ一時的にでも父母と遠く離れることを恐れた為でもあろうが、今一つには、権門に近づくことを恐れた故である。さらには万治二年（一六五九）四月、姉春光院腹の直澄が直孝の後を継ぎ、彦根藩主となったその年の秋、元政は母と共に身延に詣た足で江戸に行ったが、この時、母は藩主母堂となった春光院の元に行ったが、元政は民家に宿し終に行かなかった。このことにも自ら権門の場に足を入れることを、飽く迄も避けようとする元政の強い姿勢が窺える。また、彦根藩士等との交際も避けたようで、『正保四年和歌』や書簡等に見られる、あたかも同性愛がごとき親密さを示した重仲の名すら、出家以後はたと見られなくなっている。従って、この8番歌は出家以前の詠か、まだ旧感情の捨て切れない出家後間もない頃の詠であろう。出家以前の詠とすれば、単に遠くの友を思う歌である。また、出家後間もない頃の詠とすれば、「はてやなき」には、京と武蔵の距離的隔りのみではなく、俗人と僧侶との境遇の隔りをも籠めていると思われる。後述の10番歌・13番歌から類推するに、恐らく後者であろうと思う。かっての親しかった友に、夢ですら逢えぬ自らの境遇を思い、「嗚呼、自分はすでに僧侶であったのだ。」という感慨を籠めた確認、しかも、俗世を捨て去ろうとして未だ捨て切れずにいるもどかしさ等々、うたたねより目覚めてその夢を反芻し、諸々の感情に浸りながらポツネンと座す元政の姿が彷彿とする。

世をのかれてこゝかしこありきけるころ

9　のかれてはやまさとならぬやともなしたゝわれからのうき世なりけり

元政は妙顕寺で修業中、たとえば、江州蓮華寺等諸方の寺院や、洛中洛外さらには近江等の旧跡を歩いたようである。この歌は妙顕寺時代の詠であろう。

はやくのともたちのもとへつかはしける

10　ものことになをそわすれぬいてしよをおもひいてしとおもひすつれと

8番歌と同じく俗世を捨て去ろうとして捨て切れない気持を歌っている。しかも、「いでしよ」とあって明らかに出家後の歌であり、それも、そう時を経ない妙顕寺時代も初めの頃の詠であろう。

ひとのうたすゝめける返事に

11　木のはしにたくふ身なれはいまはなをこと葉のはなもいろやなからん

題をさくりてうたよみしに寄道祝

12　のかれてものとけき御代のめくみをはつまきのみちのやすきにそしる

11番歌は『枕草子』の「思はん子を法師になしたらんこそ心苦しけれ。ただ木の端などのやうに思ひたるこそ、いとほしけれ。」（校訂三巻本枕草子五段）を念頭に置いての詠であり、「木のはしにたくふ身」とは、「すでに僧籍にある身なので」の意である。また、12番歌には「のかれても」とあり、共に出家以後の歌である。しかも、そのニュアンスから、これらも出家後そう時を経ない妙顕寺時代前期の詠であろうと思われる。

ともたちのふみをこせたる返事に

13　なれしよのともをそおもふやまふかくおもひいる身もいは木ならねは

この歌も8番歌・10番歌と同様、俗世にあった頃の友を捨て去ろうとして捨て切れない心を詠じたものであり、出家後間もない頃の詠であろう。「やまふかくおもひいる身」は特に深草を連想せずともよい。心を期して山門に入ったの意、即ち強い覚悟で出家をしたの意と考えてよいかと思う。8番歌から13番歌まで妙顕寺に入って間もない頃の詠と思われる。

やまさとにてほとゝきすをきゝて

14　しのひねもやすくやもらすほとゝきすわれひとりすむまつのとほそに

15　ほとゝきすなれもみやまをいてゝいなはいとゝかたらふともやなからん

出家後の歌であるが、「まつのとほそ」「みやま」とあるからといって深草と結びつける必要はない。承応元年（一六五二）には顕寿、承応二年（一六五三）には宜翁日可、同三年（一六五四）には尊中日勝というように、すでに妙顕寺にある時から来投する弟子があり、深草に称心庵を結んだ時には、既に「環堵蕭然鹿縁来り襲はずと雖も、猶求道の士来り従ふ。（略年譜）[2]」の如きであった。歌は一人静かに道を求める元政の姿を映しており、ようやく俗世への感傷から脱し切った頃、即ち出家後二・三年を経ての詠と思われる。

わらはともたちなりし人いなかよりたつねきてかへりしとき

30　まよふそよあふはわかれのことわりはひとにもさこそをしへける身の

田舎より訪ねて来たとあるから元政は都にいる。即ち妙顕寺時代の詠である。「ひとにもさこそをしへける身の」とあるところに、僧侶としての自覚と自信らしきものが見受けられ、同じく「迷う」歌であっても10番歌・13番歌とは趣を異にする。あるいは妙顕寺時代も後半に入っての詠であろうか。

景軌父公軌七周忌に法華経ならびに開結二経をみつからかきて供養に三十首歌すゝめける此経難持

32　いかにしてしはしたもたんうき身さへうけかたき世にあへるみのりを

打它公軌[3]の没年は正保四年（一六四七）三月十四日である。従って、その七周忌は承応三年（一六五四）三月十四日であり、この歌はその頃の詠である。この翌年、元政は妙顕寺を出て深草に称心庵を結んだのである。

京よりまてきて世をいとふ人のこゝろもふかくさのさとをはかれすとはんとそおもふといひし人に

38　かれすとへひとのこゝろはあさくともたゝふかくさのさとのあはれを

言うまでもなく深草隠棲後の歌である。しかし、いつの頃の詠であるかは、この歌のみからは判然とはしない。ただ、集中初めての深草の詠であり、あるいは隠棲間もない頃の詠であろうか。

深草のさとにすみなれてのち

51　すまてやはかすみもきりもおり〳〵のあはれこめたるふかくさのさと

「すみなれて」とあるから隠棲後二・三年経た頃の詠であろう。

このすまゐもなを人めしけくて

68　世をいとふやまをもひとのとひくれは市にやさらに身をかくさまし

先述の如く、深草に称心庵を結んだ頃には既に宜翁日可・日勝等元政を慕う弟子が随行していたが、それでもまだ人の出入りは少なく、元政を師と仰ぐ求道の士達の僧房として静かな暮しであったと思われる。しかし、僧として、また文人として元政の名が高まるにつれて、深草は人の出入りも頻繁になっていった。この歌は、そのように、ようやく人の出入りの激しくなり始めた頃の詠と思われる。恐らく四・五年も経た頃の詠であろう。

顕寿七周忌に

87　なき人をなをこひくさの七くるまめくれるとしのかすはつめとも

「吁呼顕寿年始三歲自知レ慕二三宝一永不レ昭二葷腥一四歲之冬乃免二於父母之懷一遠自二江左一来従二吾枯淡一者五年矣……乙未之春偶病而死矣時年八歲不幸短命慟哭有レ余也……」、これは『草山集』巻十の「顕寿小師七回忌塔婆銘并序」の序の一部である。顕寿は兄半平元秀の子である。承応元年（一六五二）春、五歲にて元政に随って得度し弟子となった。しかし、明暦元年（一六五五）僅か八歲にして早世したのである。歌はその七周忌、寛文元年（一六六一）の春の詠である。

＊　＊

ここで『草山集』について触れておきたい。『草山集』は版本二十巻続集十巻目録一巻から成る元政の漢詩文集である。寛文二年（一六六二）陳元贇の序、寛文三年（一六六三）太嶽の序があり、延宝二年（一六七四）平楽寺書店刊行である。活字本としては『日蓮宗全書』に収められており、また、昭和五年（一九三〇）平楽寺書店発行の単行本『標註草山集』もある。以後の論述の都合上、今、その内容について少々述べておきたい。

凡そ、かくの如き漢詩文集は、主題あるいは形態によって部類されたブロックごとに巻を形成し、各巻はそれぞれ作品の成立年時順に配列されているのが通例である。『草山集』も通例に従っているが、巻一から巻二十までと巻二十一から巻三十までとでは多少形態が異なっている。巻二十までは文と詩に部類された上で、さらに文は「叙」「書」「記」「伝」「行状墓誌」「銘」「銘箴讃頌」「仏事」「雑著」「賦」に、詩は「五言古」「七言古」「五言律」「六言律」「五言絶」「七言絶」「雑体」に細部類にされており、それぞれ巻を形成している（「書」「記」「雑著」は二巻、他は一巻）。巻二十一以降は詩と文に大別されているのみで細部類はされておらず、巻二十一から巻二十四までが詩、巻二十五から巻三十までが文となっている。

また、成立年時の明確な作品を取り出し、配列に従って列挙するという作業を行った結果を述べると以下の如くである。

巻二十までは各巻ごとに作品の成立年時順に配列されており、巻三十以降は詩・文それぞれ巻を通して成立年時順に配列されている。また、明確な年号で一番早い年号は慶安四年（一六五一）であり、一番遅い年号は寛文七年（一六六七）である。このことから『草山集』は元政出家後没年までの間の漢詩文を収録したものであると推定される。また、巻二十までは寛文四年（一六六四）以前の年号しか見られず、巻二十一から巻三十までは寛文五年（一六六五）以降の年号しか見られない。しかも、先述の如く、巻二十までは各巻ごとに部類がなされており、巻二十一以降は詩と文に大きく二

部類されているだけである。このことから、先ず寛文四年（一六六四）までの作品を二十巻に編集しておき、後に寛文五年（一六六五）以降を続集として編集したのであろうと推測される。さらに付言すれば、寛文三年（一六六三）秋の太嶽の序中に「住(スル)二草山一(ニ)幾(シト)レ乎十年其間著述甚多遊(シ)二其門一(ニ)者録(シテ)レ之為(ヲナス)レ集凡二十巻(トチ)」とあり、寛文三年（一六六三）に一度二十巻に編纂されたものと思われる。そして、恐らく刊行するつもりであったのであろうが、何らかの理由で―このころ『元元唱和集』の刊行の計画があった為、あるいは、同時に刊行することを避けたのであろうか―刊行されなかった。そして、寛文四年（一六六四）の作品はそれぞれの巻に追加したが、刊行が当分見合わされることになった為であろうか、そのまま放置されたものと思われる。そして、寛文八年（一六六八）元政が没した為、弟子達によって改めて刊行の計画がなされ、寛文五年（一六六五）以後の作品は、詩と文に大別し、続集十巻として追加し、計三十巻として刊行されたものと思われる。また、総目録の後に付されている「行状」が建仁寺僧通憲によって寛文九年（一六六九）に記されているのから推して、没後間もなく編纂せられたものと思われる。それが、大部な為、版木を彫るのに手間どってか、六年後の延宝二年（一六七四）の刊になったと思われる。因みに、集録された作品の総数は文三百二十八首、詩千四十三首である。

以上『草山集』について述べて来たが、要約すると『草山集』は巻一から巻二十までは出家〔慶安元年（一六四八）〕以降寛文四年（一六六四）までの作品が収められ、それらは各巻ごとに成立年時に従って配列されており、巻二十一から巻三十までは寛文五年（一六六五）以降没年〔寛文八年（一六六八）〕までの作品が収められ、詩は詩（巻二十一～巻二十四）で、文は文（巻二十五～巻三十）で、それぞれ成立年時を追って配列されているということである。

以下にまた、『草山和歌集』に話をもどす。

＊　＊

八月廿日はかり平等院にふけゆくまてつきをみて

98 たちかへるそらもわすれてふくるよの月にいさよふうちのかはなみ

はしのうへにやすらひて

99 うらやましうちのはしもりいくあきのつきをなかめてとしのへぬらん

太子伝をよみしついてに

100 よしあしとわかれしすゑののりはみななにはのみつのなかれなりけり

101 すへのよにたれくみてしるのりのみつとみのをかはゝなをたえねとも

これらの歌を見る時左記の『草山集』巻二十一の詩が参考になるかと思う。ここにはその詩題のみを掲げるが、

○八月十四夜稲荷祠見レ月遇レ雨

○八月十五夜

○守治橋辺俟二同遊一

○守治懐旧

○山中即事

○月夜偶成

○二

○三

○遊二谷口一

○題二木幡地蔵堂一

○秋遊二平等院一
○守治偶成
○其二
○其三
○楼岸
○二
○天王寺拝二聖徳太子十六歳像一
（七題略）
○九月朔在二温泉一会二小甥了夢十三回忌一唱二一偈一薦
○温泉雑詠

「温泉」とは有馬温泉のことである。『温泉遊草』(4)によれば寛文五年（一六六五）八月二十五日宇治に遊び、その晩夜船で伏見から大阪に向ったとある。以下、二十五日夜明けに大阪に着き天王寺に詣で、大雨の為そのまま三日間大阪に滞在、二十九日住吉・尼崎を経て夜有馬温泉に到着、九月九日まで滞在とある。この時の詩が『温泉遊草』に収録されているが、「楼岸」から「温泉雑詠」までそのままそっくり『草山集』に採録されている。従って、右に掲げた『草山集』の抜粋は寛文五年（一六六五）秋の作である。ところで、「守治偶成」の詩に

万里ノ長流万里ノ波　幾回吟断大夫ノ歌　来々去々河橋ノ上　独立ニ秋風ニ感慨多シ

がある。詩中「大夫ノ歌」について『標註草山集』の頭注は『新古今和歌集』巻十七の題しらす　人麿

ものゝふの八十守治川の網代木にいさよふ浪の行えしらすも

を掲げている。人麿を「大夫」と称するのは、『古今和歌集』の真名序中に見え、また、元政は座右の書として『古今和歌集』及び『新古今和歌集』共に精通していたと思われるから、この頭注は妥当であると言える。そこで背景の人麿の歌を念頭に置いて、「守治偶成」の詩と98番歌・99番歌を対照する時、詩の起承二句が人麿の歌を含めて98番歌と、転結二句が詞書を含めて99番歌と符号し、詩歌の心は一つであると言える。詩歌共に楽しむ元政は、同じ題、同じ境地を和歌と詩に同時に託すことを屢々行っている。これなどもその例であろうと思われる。また、これら宇治に関する詞・歌の後にそれぞれ聖徳太子に関する詩・歌の続くのも偶然とは思われない。これも恐らく同時期の作と思われる。従って、98番歌・99番歌・100番歌・101番歌は寛文五年（一六六五）八月も下旬の詠と思われる。

ちゝのひさしくすみける家にて月前梅といふことを

114　そてのうへは月やあらぬとかすむよにはるやむかしの梅かゝそする

おなしところにて

115　おもかけもたゝさなからのふるさとをうつみなはてそ庭のあさちふ

116　ふみわくるあとはむかしの庭のおもにたゝ名もしらぬくさそしけれる

石井家は九条に伝領の地を所有していた。宗政五十緒氏は「元政―その出自―」（『竜谷大学論集』第四〇〇、四〇一合併号）の中で「それは平安後期、藤原忠通の時代以来の伝領の地であり、元秀もこの地に生まれ、又、元政も少年時代この家に遊ぶことがあった。（六七九頁）」と記しておられる。ところで、元政が彦根藩士として彦根に在った時は、父母はこの九条の家に住んでいたと思われる。そして、慶安元年（一六四八）妙顕寺に入った時、父母は妙顕寺に近い一条に移り、明暦元（一六五五）深草に住むようになると、父母も深草に近いこの九条の家に帰っている。そして、父は万治元年（一六五八）十

年二月この九条の家で死去したのである。猶、この後、母は深草に住み、寛文七年（一六六七）十二月養寿庵にて死去した。また、宗政氏の指摘にもあるが、「石井系図」(5)によれば、九条の家は河本氏から石井家に養子に入った元徳が相続している。

「ちゝのひさしくすみける家」とはこの九条の家のことである。また、「すみける」とあるのは、すでに父没後であることを意味している。無論、三首の歌には亡父への哀惜の情が深く漂っている。

ところで、『草山集』巻二十三に

遊二九条旧業一賡二閑誉韻一

開歳倏月余　居諸如二奔水一　感二時念一維桑一　相携訪二遺址一　喬木似二昔時一　恭敬入二旧梓一　赤脚老守レ門　黄鶯啼不レ已　惻愴信多レ悲　回レ首観二容止一　破屋雖二猶存一　風雨不レ可レ恃　父去如二昨夢一　流幻催二年矢一　佗時重復来　尚曷若二今喜一　非二特吾家君一　遠祖斯掌レ祀　世道変二陵谷一　奪レ朱悪二彼紫一　天地之逆旅　万事皆如レ是　往者不レ可レ諫　只可レ惜二此晷一　庭梅且勿レ剪「　庭草且勿レ薙「　家君之所レ栽　家君之所レ灑　春寒野菜稀　引レ客心自恥　有レ客呈二妙偈一　誰謂二雕虫技一　我非レ美二言辞一　且美二其真理一　真理可レ興レ人　亦能足レ感レ死　噫父兮母兮　豈不レ諒レ人只　含レ羞読二君詩一　我情薄如レ紙

又

感レ春尋二旧業一　緑竹尚猗々　祖遠巳千載　父亡経二幾時一　山田曽卜地　佐国此留レ詩　破屋愧二賓侶一　峭寒林日篩

の詩が見え、和歌と詩の量的相違による内容の差はあるにしても、その背景、素材、心情等全く同じであると言って良く、これらは同じ時に同じ場所で、同じ心を、且は詩に且は歌に託したものであろうと思われる。詩の成立につい

ては、次の詩に「留二別慧明一」があり、その序中に「丁未之春」とあってその成立が知れ、配列から推してこの詩も同じく寛文七年（一六七）春の作であることがわかる。従って両者が同じ時の作であるとすれば114番歌・115番歌・116番歌も寛文七年（一六七）春の詠となる。

因みに、『草山集』には、九条旧宅での詩が右記の他に二ヶ所見える。参考までに次に掲げ、併せてその成立時期について記しておく。

遊二九条旧宅一得二客字一

少年嬉遊地　人去空有レ跡　蒙籠竹林中　独留二一区宅一　老矣陶家松　本是数寸碧　残花両三種　有レ笋聊可レ擘
我無二半瓢酒一　烹レ茶待二幽客一　人心如二面殊一　寓レ物各自適　任レ情述二我懐一　作レ詩莫レ拘レ格　明日視二今日一
猶二今之視レ昔

其二

吾心不レ在焉　思レ人遊二遺跡一　雖レ似二淵明廬一　不レ同二晏子宅一　脩竹幾千竿　長屯二旧時碧一　除レ詩誰散レ懐　高
吟笑二巨擘一　閑花是主人　携レ友共成レ客　同声自相応　数篇皆閑適　水石与二花草一　満目入二詩格一　亦知物
移レ気　吟興慰慕レ昔　（巻十四）

（二年十二月）

この詩の数篇後に「万治巳亥臘月廿四日」を明記した詩があり、少なくともこれ以前の作と思われる。また、「九条旧宅」とあり、詩の内容から推しても、父没後の作と思われるので、恐らく万治二年（一六五九）暮春の頃の作であろう。

次二韻元賛老人遊二九条旧業一

故業猶憐水竹居　那知佳客到二荒墟一　適随二老母一移二藜杖一　更待二騒人一迎二笋輿一　筆倒二三江一潤二枯骨一　詩聯二
雙璧一照二寒廬一　周光佐国吟遊久　今日添レ君興有レ余　（巻十七）

元政と陳元贇との出会いは万治二年（一六五九）身延詣の途中名古屋に於てである。時に元贇は尾張藩に仕え、名古屋に住していた。この会見で意気投合し、以来手紙の交換によりますます親交を深めていった。やがて寛文二年（一六六二）の春、元贇は藩主の容認を得て上洛し、京都に長期滞留することになる。かくして元贇が瑞光寺を訪門するようになったのは、上洛以降であり、元政元贇相連れ立って九条旧業に遊んだのもまた然り、寛文二年（一六六二）春以降である。また、既述の如く、巻二十までは寛文四年（一六六四）までの作と思われるので、この詩は寛文二年（一六六二）から寛文四年（一六六四）の間の成立となる。

東寺の蓮さかりなるころつとめてみにいきてくれにかへりにける鴨川わたるとて

126　なつのあつさもしらすあさかはやゆふかはわたるみちのゆきゝは

『草山集』巻二十四に東寺に関する詩が見る。今、その部分の題を抜粋すると、次の如くである。

従レ母観レ祭
晩自二人家一帰
東寺池蓮
夏日遊二東寺一
謝二東寺長順恵レ瓜
瓜歌
和二納涼詩一
早行
重遊二東寺一観レ蓮

蓮得二颱字一

東寺紀事

「従レ母観レ祭」の序に「是歳丁未午月」とあり、「夏日遊二東寺一」の起句に「五月東林花正香」とあって、これら東寺の詩は寛文七年（一六七）五月の作であることがわかる。『草山集』に見える東寺行きはこの所のみである。また、一つの事件、一つの事柄を題にこれ程多くの詩を成すことも、『草山集』にそういくつも見られない。この東寺行きはよほど印象深いものであったと思われ、和歌にも歌われた可能性も十分にあったようである。また、右抜粋中、「早行」の詩は、

衝レ霧過二村路一　乗レ涼思冷然　農夫荷レ鋤出　旅客倚レ籃眠　濡二足九条水　回レ頭数里天　漸知東寺近　隔レ塔見二人煙一

であり、朝夕往路帰路の違い、内容の多少の差はあるが、ニュアンスに於て126番歌と非常によく似ている。恐らく、同じ東寺蓮見物の時の作と思われるが、このことはそれぞれ以下に続く和歌・詩を見て行くと一層確かなものとなる。

淀川の舟にて

128　よるひるとなかれもゆくかよとかはのよとむとひとはよそにみれとも
宇治川の水上にのほりて人もかよはすしつかなるところにひさしくなかめて柴舟のゆきかふをみるにかほる
大将のたれもおもへはなといひしもおもかけにうかひて

129　人のよはたれもおもへはみつのうへにうきてはかなき宇治のしはふね
雨ふりける日平等院にまうてゝ堂のもとにものうちしきていとひさしくおりけりかねのこゑかすかにきこゆるをいつことゝへはみむろなりといふおもひつゝけて

130 はかなくてけふもくれけりあすしらぬみむろのやまのいりあひのかね

あきのころうちにせうえうしてあめさへふりけるにおはなかりふきといひしもけうありてやとりぬふけゆく夜のいとしつかにて

131 おはなふくかりほのいほのよるの雨にさとのなしらぬかたしきのとこ

月のころ醍醐にのほらんといひやりたるにかみにはさはるとありしもへとありしを雨いたうふりてにはかにはれたるゆふへふもとのさとにきて月のすみのほるによめる

132 きてみよといはすはつらしあめはれてかさとりやまにいつるつきかけ

中谷といふところにてひたのをとをきゝて

133 なにこともいまはやまたのひたふるにすてゝやすまむたにふかきいほ

とある。一方『草山集』は先述の一連の東寺に関する詩の後数題置いて

病中遊二宇治一

冒レ雨遊二平等院一

示二良閑老人一

雑詩

藤森即興

醍醐路上吟

醍醐山下看レ月

中谷

といった題の詩が見える。そして、東寺の詩と宇治の詩の間、略した数題の中には「李夏過二吉水一得二泉字一」「避夏」「谷口早秋」「秋来」等の詩が見え、この間、夏から秋への季節の移行を示している。従って、東寺行きから中谷行きまでが寛文七年（一六七）夏から秋にかけての元政の行動であったことは明らかである。そして、この部分、『草山和歌集』『草山集』を対照すると、「東寺」「宇治」「醍醐」「中谷」と見事に符号し、両者が同時期の作であることはまず間違いのないところであろう。とすれば126番歌から133番歌までは寛文七年（一六七）夏から秋にかけての作となる。

遠村蚊遣火

127　かやりひのけふりたてすはゆふまくれありともみえしやまもとのさと

は夏の詠ではあるが、寛文七年（一六七）であるという手掛りは特にない。ただ前後から推し量るのみである。

題しらす

142　そなたそとなかむるそらもかきくらしいとゝへたつるゆきのふるさと

右の歌は、『温泉遊草』(4)に初句「そなたそと」が「そのかたと」として収められている。『温泉遊草』の歌は、寛文七年（一六七）秋、有馬温泉での詠であり、142番歌は、初句は異っているものの、『温泉遊草』の歌と同歌と思われるので、寛文七年（一六七）秋の詠である。

143番歌から147番歌は「母のなくなりぬるころひとのもとより五首のうたよみてとふらひける返事に」の詞書、148番歌は「はゝのなくなりてのち」の詞書、149歌集は「おなじ年のくれに」の詞書を持つ。母妙種の没年は寛文七年（一六七）十二月六日であるから、これらの歌は寛文七年（一六七）十二月の詠であることは明らかである。そして、最後の歌、150番歌は「辞世」の歌であるから寛文八年（一六八）二月十八日の詠である。

以上、『草山和歌集』の和歌中、その成立時の確定あるいは推定しうる和歌を抽出し考察して来たが、整理すると次の如くになる。

1番歌	慶安元年新春	101番歌	同　右
8番歌	妙顕寺時代（入山直後か）	114番歌	寛文七年春
9番歌	同　右（前期か）	115番歌	同　右
10番歌	同　右（同　右）	116番歌	同　右
11番歌	同　右（同　右）	126番歌	寛文七年五月
12番歌	同　右（同　右）	128番歌	寛文七年秋
13番歌	同　右（同　右）	129番歌	同　右
14番歌	同　右（入山二・三年後か）	130番歌	同　右
15番歌	同　右（同　右）	131番歌	同　右
30番歌	同　右（後期か）	142番歌	同　右
32番歌	承応三年三月十四日	143番歌	寛文七年十二月（六日以降）
38番歌	深草隠棲後（間もない頃か）	144番歌	同　右
51番歌	同　右（二・三年経た頃か）	145番歌	同　右
68番歌	同　右（四・五年経た頃か）	146番歌	同　右
87番歌	寛文元年春	147番歌	同　右
98番歌	寛文五年八月下旬	148番歌	同　右

99番歌　同右　　150番歌　寛文八年二月十八日

100番歌　同右

かくの如く、少なくとも成立年時の確定もしくは推定し得る和歌は成立時を追っており、この延長線上に添って『草山和歌集』を推定すれば、恐らく成立年時に従っての配列であろうと思われる。そして、この推定に従って改めて『草山和歌集』に目を向ける時、右記以外の成立年時の推定し得ない和歌についても、少なくともその和歌が、現在の位置にあることが特に不自然であるというようなことはない。

以上、『草山和歌集』の配列について考察した結果、一応成立年時に従っての配列であろうとの結論に達したが、次に、その成立事情について触れてみる。

○

『草山和歌集』の刊行より約一六〇年後の天保九年（一八三八）に、江戸の鶯谷に住む一隠者義天によって書かれた注釈書に『草山和歌集孤考』（版本二巻二冊　天保九年刊）がある。その序に「草山和歌集といえるは……不滅（イケルヒ）日をり〳〵の口遊（クチズサミ）また人にやりたる歌辞世の歌も入りにたれば身まかり給ひて後にやその聖の歌を集るなればしかいふなり」とある。無論、「身まかり給ひて後にや」と疑問を呈しているように、義天なる隠者が『草山和歌集』の成立事情について正確に知っていた訳ではない。しかし、本稿の初めにも記したように、最後の歌が辞世の歌である以上、最終的に現存版本の形態編集されたのは元政没後であると考えるのが一般的であり、あるいは『草山和歌集孤考』序の如く、後人（恐らく弟子達であろう）が元政没後、元政の手控えの歌稿の如きものに加えて、散在していた和歌を拾集し編撰したかとも考えられる。しかし、それについては疑問が残る。以下、その疑問を述べ、併せて『草山和歌集』の成立事情について考えてみたい。

今、後人の編撰と考えて百五十首という歌数を案ずるに、多数の歌を百五十首に厳選したものか、拾集した結果が百五十首程度の歌数しかなかったか、このどちらかであろう。しかし、前者と考えるには大いに抵抗を感ずる。なぜなら、後人といっても恐らくは弟子達の一人または数人であろうから、その立場上師の歌を僅か百五十首に厳選するとは思えない。たとえ版行の都合で量的な制限であったとしても、三百首或いは二百首でもよかったはずであり、少なくとも、少しでも多く残そうとするのが遺稿編撰の常識ではなかろうか。従って、後人が多数あった歌を百五十首に厳選したとは考えられない。次に、後者即ち編撰の際百五十首程度の歌しかなかったと考える時、二通りの理由が考えられる。一つは、元政がその程度の歌数しか詠まなかったとの考えである。しかし、この考えも捨てざるを得ない。なぜなら、正保四年（一六四七）一年間で二百三十五首（発句及び重出歌を省く）を残した元政が、たとえ和歌より漢詩に興味を示したとしても、出家以後没年までの二十一年間に詠んだ歌数にしては少な過ぎる。たとえば、『草山和歌集』には「十首歌」「百首歌の中に」と題する歌が採られているから、元政の遺詠が二百首や三百首程度のものではなかったことは明らかである。また、歌人の常として、更には几帳面な元政の性格から推して、詠んだ歌の多くは書き止めておいたと思われるから、詠み捨てにして、たまたま残っていたのが百五十首程度であったとも考えられない。そこで考えられる第二の理由であるが、ある時点で元政の手が加わり、結果として、元政没後には百五十首程度の歌稿しかその手許に残されていなかったとの考えである。以下、この考えに基づいて推論をしてみたい。

元政は生前、自歌集の編撰及びその刊行を意図していたものと思われる。しかも、その対象とする歌は、出家以後のものであったと思われる。恐らく、出家までの詠草類は、たとえば『深草元政上人和歌集』のごときは何らかの形で処分し、妙顕寺あるいは称心庵には持って行かなかったのであろう。従って、出家以後書き留めておいた手控えの詠草から、死期を悟ってから短期間に、特に意に適う和歌を厳選したか、あるいは徐々に整理していったものを更に

最終的に厳選したか、ともかくも自ら歌集の編撰に手を染めたものがあって、最終的には百五十首に近い歌数にまで厳選していたのではなかろうか。従って、刊行の時点では、

一、百四十九首については編撰されており、百五十首目に辞世の歌を加えることが指示されていたか、辞世の詞書だけが書かれていたか、あるいは、辞世の歌も用意してあったとも考えられなくはないが、ともかくも、殆んど現存版本の形態になっていた。

二、元政自身により百五十首近い歌数―二百首を越えていれば二百首となったであろうから、二百首は越えていなかったと思われる―にまで厳選されていたが、そのまま死去してしまった為、刊行に際し、後人が何首か削除し、百五十首とした。

の二つの推測が成り立つが、ともかくも『草山和歌集』はほとんどが元政の自選編集によるもので、後人の手が加わったとしても、それは極く僅かなものであったと思われる。

以上のごとく愚考してみたが、元政自筆の草稿本、あるいは明らかにその転写本と思われるものが発見されていない現在、推測の域を出ない。また、『草山和歌集』の基となった元政の詠草も発見されていないが、これについては、あるいは、自らの選に漏れた歌が後に人目に触れることを嫌って、元政自身破棄してしまったのではないかとも考えている。

注

(1) 『深草元政上人和歌集』(写本一冊、書写年、書写者不明)所収。
『深草元政上人和歌集』については、かつて『文学論藻』第四十八号(昭和四十八年十二月東洋大学国文研究室刊)において、その紹介を兼ね成立について触れた。今、要点のみを記しておく。『深草元政上人和歌集』は、『六百番歌合』の題による

「百首和歌」と、「正保四年丁亥元日」の詞書の和歌を初めとする二百五十首の和歌（内一首重出）と三句の発句からなる小歌集（これを「正保四年和歌」と称す）との、いわば合綴歌集である。そして、「百首和歌」は、寛永十二年（一六三五）から寛永十八年（一六四一）の間の成立と推定され、「正保四年和歌」は、元政出家の前年である正保四年（一六四七）一年間の詠歌を収録したもので、特に部立を明記していないものの、四季雑に配列されている。総じて、『深草元政上人和歌集』は、元政出家以前の歌集であり、何らかの事情で世に埋れ今日まで知られなかった歌集である。

(2) 『標註草山集』（昭和五年十一月 平楽寺書店発行）所収「草山元政上人略年譜」。

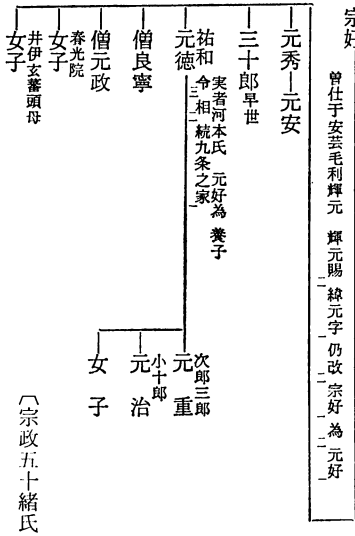
(3) 打它十右衛門公軌、後に入道して驚月と号した。初め松永貞徳に師事し、後に木下長嘯子の門下となり、長嘯子の歌集『挙白集』の編撰に労を尽した人物である。正保四年三月十四日没。

なお、公軌については、小高敏郎氏著『近世初期文壇の研究』（昭和三十九年十一月 明治書院発行）に詳しい。

(4) 版本一冊。寛文八年（一六六八）、松庵朴元序。

寛文五年（一六六五）の「温泉遊草」（詩文二十四篇を収む）と寛文七年（一六六七）の「温泉再遊」（詩文二十八篇と和歌六首を収む）に、自堅翁松庵朴元が追悼の詩（七首）を添えて、寛文八年（一六六八）に刊行したもの。

(5) 次に、「石井系図」の該当箇所を記しておく。



（宗政五十緒氏の論文「元政―その出自―」（竜谷大学論集第四〇〇、四〇一合併号 昭和四十八年三月発行）より引用。）